
第1章 日本教育史

《学習の勘所！》

- ①室町時代までの教育史はほとんど出題されない。
- ②江戸期は教育実践家がどのような塾で、どのような内容を教授したかを中心に学習しよう。
- ③明治～第二次世界大戦の敗戦までについては、公教育制度史が問われやすい。
- ④③に加えて、大正新教育運動の実践者たちを覚えることが大切。
- ⑤戦後は学習指導要領の変遷など、教育原理に吸収されるので教育史としては出題されづらい。

第1節 奈良時代

1. 律令制下の教育制度

701年の大宝律令、718年の養老律令の制定にみられるように、710年の平城京遷都から始まる奈良時代は、律令体制での統治が行われた。教育制度は、主には式部省の管轄下におかれ、儒教（明教）・音（中国語での読解）・書・数を教える**大学（大学寮）**が中央に置かれている。また、郡司の子弟を対象に地方官僚養成を目的とした**国学**が、地方の各国ごとに設けられた。

2. 公開図書館—芸亭—

771年ごろ、**石上宅嗣**によって、わが国最初の公開図書館**芸亭**が設置された。これは、後述する空海の綜芸種智院の先例とされているため、教育機能も有していると考えられている。

第2節 平安時代

1. 大学別曹

大学別曹とは、有力貴族が設けた寄宿舍兼研究所の機能を持つ施設である。**和気氏の弘文院、橘氏の学館院、在原氏の奨学院、藤原氏の勸学院**が有名である。

これらが設置された理由は主に3点考えられている。第1が、大学と国学の形骸化である。具体的には、有力貴族は学業成績が悪くとも蔭位の制で一定の官位につくことができるため、ここでの学びを重要視しなくなってしまったのだ。第2は大学と国学への不信である。教育する者や教材の不足が顕著であり、十分な教育がそもそもされていなかったという。

第3は、そのような中でも貴族特有の教養教育へのニーズが高かったからである。平安中期以降に国風文化が起こったように、この時代は文化的な学識が尊ばれた。また、「三舟の才」といわれる詩・歌・管弦など芸能の力の高低は、人物評価に響いた。そのため、有力貴族は、こうした学識と芸術に関わる素養を磨くため、大学別曹での教育に力を入れたのである。

2. 最澄と空海

平安初期の仏教界をリードした最澄と空海は、この時期の僧侶教育にも影響を残している。

最澄は天台宗の僧侶教育の在り方として、『山家学生式』を著している。比叡山の道場では、この書に基づいた単位制的な教育が展開されたという。

一方の**空海**も真言宗の僧侶教育を高野山で展開した。ただ、空海は**綜芸種智院**において、貴賤貧富の差のない教育機会を提供しており、民衆教育への視座も有していた。

第3節 鎌倉～安土桃山時代

1. 概況

武士が政治での中心となる頃には、大学・国学のみならず大学別曹も衰退していた。武士の子弟たちは、武芸の鍛錬と、寺院等での文字習得や仏教理解という形の教育を受けて育った。これらは私教育の域であった。

というのも、鎌倉・室町両幕府とも、全国のかつ体系的な教育制度を歴史的に捉えておくほどに整備したわけではなかったからである。そして、戦国時代はそもそも統一的な政治支配が困難であった。そのため、以下には、鎌倉～安土桃山時代における特筆すべき事項（教員採用試験で問われる点）のみを紹介する。

2. 金沢文庫（鎌倉時代）

北条実時（1224～1276）は、中世の和漢の書籍を多数所蔵した私設図書館として**金沢文庫**を開設した。公開された文書を通じ、学問や研究の発展に寄与したとされる。

3. 世阿弥元清『花伝書（風姿花伝）』（室町時代）

能楽の大成者である**世阿弥元清**（1363～1443）は、芸能教育論と読める『**花伝書（風姿花伝）**』を著している。教育者が教育する者を洞察する必要性、スモール・ステップに似た考えの実践（学ぶ過程を9つに分けて段階的に達成させること）、型の教育をした上でないと個性が発現できない、といったことを主張している。

4. 足利学校（室町時代）

上杉憲実（1409～1466）によって再興されたのが**足利学校**である。ここでは儒学・漢学詩、天文、兵法、医学などが講じられ、多い時には3000人以上が学んでいたという。なお、フランシスコ＝ザビエルは、足利学校を「坂東の大学」と評している。

5. 民衆への教育

室町時代には、往来物と呼ばれる教科書を用いて文字教育や、仏教・儒教の教え、職業ごとの心構えなどの教育が、民衆に対しても図られていたという。往来物の中で特に有名なものは、『**庭訓往来**』である。